

可児市教育委員会で、外国人児童生徒の教育コーディネーターとして勤務してきた女性職員が退職した。九月からは、名古屋市の愛知淑徳大学で教員として働いている。

彼女は三年半前に関西から可児に来た。当時は市職員ではなく大学院生の身分で、外国人の「不就学」について調査していた。国内で初めて実施された外国人の教育問題の本格的調査で、結果は本紙でも報じた。

彼女が来てから、可児市は変わった。多くの人々が外国人の教育問

### 別れ (田中 篤至)

題に興味を持ち、改革に乗り出した。語学指導や適応指導をすすめるためのプレスクールを設置し、外国人登録に来た人は市教委の窓口に導かれ、学校の制度について学べるようになった。外国人教育の先進地として、全国から視察が相次いでいる。「大学院生」が、十万都市の行政を動かす原動力になるさまは取材していて圧巻だった。

別れ際の言葉は「勉強したいブラジル人の若者は多い。大学で働いたら進学させられるかも」。心からエールを送りたい。



2006年9月4日 中日新聞岐阜県版コラム「鶇の目」より

新聞記者というお立場から私の活動を応援して下さった田中篤至さん。田中さんが何度も繰り返し無名の私の活動を報道くださったことで、可児市民の外国人の不就学問題への関心が高まりました。

この記事(コラム)を読んだ知り合いから掲載日の朝に連絡をもらい、私は初めてこのコラムの存在を知りました。当日のサプライズにしてくださったことから、田中さんのハートを感じちゃいます。このコラムは、私の宝物の1つです♡